



涙が出た。

久しぶりに泣いた。

頬をつたわる熱さにあごで気付く、鼻をすすって、指で滴を払った。

身体が、顔が燃えるように熱い。

機械室と記されたプレートの掛かっていた、地下五階の冷たい部屋。その床を這う太いパイプの上に座り、端末に映し出された偽物のノイズのかかった、ゆがんだ映像を見つめている。

「相手が違う」

一週間前から仕掛けていたらしい何本ものケーブルを抜きながら、素っ気ない口調でケンジが言った。それが余計に悔しくて、また身体が芯から熱くなり始めるのを意識の片隅で感じとる。

私は負けた。

エンケージから三秒もない。

気付くと、あこがれの〈ブラッディ・バイソン〉は頭部センサーのほとんどをやられ、機能を停止していた。

「逃げるぞ」

耳の近くで、ケンジが囁く。見ると丸めたコードを高い肩に掛け、私を見下ろしている。

「あしが……、」

「え？」

「足が、動かないよ。……悔しくて、」

細い目が、冷たく見返す。

(そんな目で見ないでよ)

ケンジはコンソロールの前に座り込んだ私の腕を取り、強引に引いた。

「いくぞ」

叩き潰されたプライドを、身体を、無理やりに引き摺られる。

片腕に手製のコンソロール・ボックスを抱え込み、もう片方に私を抱え込んで走り出す。

どこへ逃げると言うのだろう。逃げ場なんてないのに。

私有接続権の無断使用。

罪が明らかになれば、もう一つの現実で生きる権利を、私は永久に剥奪される。

プロのマスターのなる夢をかなえる事も、モンスターの操作も出来なくなる。

(ゴミ置き場の腐臭の中に、逆戻り……)

退屈で、行き場のない世界に戻る事を想像して、身震いをした。折角、薄汚い自分の中に見つけた輝きの原石なのに。

「走れるか」

低い声でケンジが聞く。

気付くと、ねっとりとした空気が肌にくっついている。

IMSの本社ビルの裏の道路に立っていた。侵入する時には落ち着いて見る事が出来なかったビルを仰ぎ、その映像では見慣れた姿を、不思議な気持ちで見た。隣で、滅多なことでは息を切らさないケンジが、肩を盛んに上げ下げしている。人通りは少ない。

私は、ゆっくりと頷く。

「……よし」

荒れた呼吸を収め、上背のあるその体をすくと伸ばす。ため息のような声が、やっと、そう言った。

私には座右の書があるというと、誰もが驚く。

たいてい、丸くした目を疑い深そうに私に向けてどんな本だと聞き、大戦前の文学者の名前を幾つか挙げ、そのどれにも首を横に振ると、それこそ興味津々とでも言いたげな目で私を見る。

しかし私が端末を取り出すとその興味も、真冬に吐き出された湯気のように、周囲の見えない空気の中に掻き消えていく。

——なんだ。データか。

酷い人はそう言う。それこそ、金メッキの指輪をみるようにせせら笑い、古典を読みなさい、再版本でもよいから、とにかく本の重さを実感してから文字に接しなさい、と続ける。

私が端末にそのデータと呼び出すと、冷笑は最高潮に達する。

——子供の読み物だ。

——事実無根で、荒唐無稽なおとぎ話だ。宣伝用の、コマーシャルだ。

——僕が、もっといい本を教えてあげるよ。

ニコニコして丁重に断り、それから座右の、という言葉の意味をご存じですか、と聞き返すと、その誰もが、途端に私を見る視線を冷たくする。

——なんだ、マスター志望か。モンスター馬鹿か。

そして、一言吐き捨てて、去っていく。

大抵の人は、人生が何気ない一言で変わることを知らない。どんなに未熟な人の一言でも、その言葉に人の重みをかけようと意図すれば、それが伝われば、人は変わる。

ましてや、それが人の全てを話した事なら。

私にとって、＜洞窟には骸骨＞はそういうデータだった。

このデータを目にしたとき、私の人生は決まった。

闇を見た少年が、希代の〈スケルトン・マスター〉の全てが、この私を魅了した。以来、私はどうしようもないモンスター馬鹿だ。

馬鹿は人ではない。

私には一般常識が通じない。ものを見る視点が、決定的に違う。全ての価値観が、モンスターを中心にしている。仮想空間で展開される、機械怪物と怪物使いたちの世界が、私の全てなのだ。

何の役にも立たない、IMS社を中心とした情報のやり取りが、この世界の全てなのである。しかし、この映像とデータで構成される世界は、この世にもう一つの現実を作りあげてしまった。もう一つの現実、ファン、報道者を通して現実染み込んだ。そしてそのもう一つの現実こそが、私にとっては、唯一の現実なのである。

信じ難い事かもしれないが、馬鹿には馬鹿なりの掟がある。

たとえば、近づき過ぎないと言うのが、〈馬鹿の掟〉第一条になる。

人間の集中力はせいぜい数時間しか続かない。一日中、コンソールを握り、IMSに接続し続けても、得られる結果は視力の低下と、腱鞘炎になった腕と、膨大な額の請求書ぐらいなものだろう。

少し距離を取って、自分の操作とモンスターの事を考えたり、場合によっては忘れてしまった方が、実入りがある事が多い。

第二条以降は、プロ・マスターと戦わない、会わない、他に何かすることを見つける、など具体的な項目がその大勢をしめる。この辺りはケンジの受け売りだ。壊れてしまうと言うのがその理由らしい。

今日、私はその掟のいくつかを破った。

IMSのエントリー・コンピューターをハッキングし、トップ・リーグに参加していた一体の操縦システムを約一分間に渡って、占有した。

これは立派な犯罪行為で、恐らくこの第二期第八戦はドロー・ゲームとなる。

掟を破った罰は、しっかりと返ってきた。

確かに私は、壊れた。

巨大な杭打ち機のハンマーに潰された小型ラジオのように、その基板もフレームも、演算チップ、コンデンサー、細かな抵抗器にいたるまで全てを、その容赦の無い重さにより、粉々にされた。

ただの、一撃で。

新環状線の車内は、いつもより空いていた。

私も、ケンジも無言。今まで経験したことのない敗北感と恐ろしいまで不安感が、私の小さな胸を鷲掴みにしている。

雷雨の中をフワフワと浮き上がる薄紫色の風船の気分。

冷たく容赦のない豪雨に絶えず打たれ、いつ、見えない雲の上から落雷があるかと、びくびくしている。風船についた紐を引っ張って、安全なコートの中に包み込んでくれる人は冷たく自分の思考の中に居る。

コンソロール、コードの入ったバッグを肩に、吊り革を吊している棒を握り、顔の高さにある、二流下着会社の軽薄な色彩の広告をジッと凝視している。私が見上げている事にも気付かず、その視線を写真の谷間から動かさない。

端末が妙に重く感じる。振り向いてすらくれない。

言葉を交わさないまま、すでに数駅が過ぎていた。

「あの……」

重さに耐えかねて口を開く。

目が動く。首をこちらに向け、谷間を凝視していた視線で私を見る。それから私だと気付いて、目をほんの少しだけ柔らかくする。いつもの事。何かを考えていた時の顔。

「なに？」

嫌な聞きかた。コンソロール・メカニック兼モンスター・エンジニアの時の、事務的な声。

「ごめんなさい」

思わず、敬語になる。年はそれほど変わらないはずなのに、完全にイニシアティブを握られている。

「何が？」

「勝てなくて……」

「相手が悪い」

素っ気ない。すぐに谷間に視線が戻る。私は悔しくて唇を噛み締める。

私がケンジに出会ったのは、一年ほど前の事だ。

IMS社直営センターにあった、一般に開放されたコンソロールの前にたむろしていた私を、ケンジは見つけた。

無料でプレイさせてくれるだけあって、操作席の前には多くのマスター気取りの連中が順番待ちをし、八つの直営センターの同じようなワンプレイ・マスターによるエンドレスのバトルロイヤルを、撃墜されたら交代という単純なルールで入れ替わりながら、プレイしていた。

壊されない限りマスターで居られ続ける。もちろん隠れたり、守りに入れば激しいヤジが飛ぶ。続ければ後ろから殴られる、蹴飛ばされる。アグレッシブに攻め続け、生き残り続ければ、ヒーロー。単純明快な世界だった。

センターの紹介だと、私はのちに聞いた。

一時間生き残っていた私のプレイを、閑散としていた操作席のすぐ後ろに貼り着いて、その後三十分見続けた。両腕の無くなった<ローラー・ビートル>で、半分に折れた角だけで戦っている状態だった。



破壊され、席を降りた私を捕まえ、

「下手だ」

と素っ気なく言った。

それから、仏頂面になった私をかなり上から見下ろして、大きな声で笑った。

妙に思い詰めた表情をしているくせに、笑い出すと陽気な男だった。

「スマレという名前だと聞いて、どんな可憐な子かと思って来たが……」

それが、笑った理由だったらしい。続きは出て来なかった。私が、膨れっ面をして、センターから出ようとしたからだ。

「気にするな。俺はタカダという。エンジニアだ」

歩きながら片手を差し出す。

「コンソロール？ モンスター？」

「両方」

「プログラムは？」

「当たり前だ。モンスター・エンジニアなら」

妙に自信のある声に、驚いた。トップ、セカンドで活躍した経験があるのかとすら、思った。

自動扉をくぐった辺りで私は立ち止まり、ぶしつけに男の頭からつま先までを眺めた。立派な服装をしている。その一着だけだろうとその時には踏んだが、エンジニアという種族は様々な人に会う必要があるのだと、しばらくして知った。

「……す、スマレは止めてよね。大嫌いなんだから」

「親がつけた名前だろ」

妙になれなれしい、それがこの男の第一印象だった。それが若い私には気に触る。

「スマレとつけた時に死んだわ。気持ちの上では」

ため息をつき、タカダと名乗っていた男は、断りもせずに煙草をふかしはじめた。私を無視するように灰を落とし、それから一息ついて言った。

「じゃあ、なんと呼べばいい？」

そう言われて戸惑った。お前、あいつ、あなた、右ローラー機動がバツグンに上手い奴、……、それぐらいしか思いつかない。

「……す、スマレ、かな」

「じゃあ、そう呼ぼう」

タカダ・ケンジという男の過去は良く分からない。

犬年だということは聞いたから、私とそれほど変わらない。今のキング、〈骸骨使い〉のキノシタと同じ年だと言うと、珍しく怒った眼をしたのを覚えている。

とにかく、エンジニアとしての腕は一流。

機体の操作に密接に絡む各部の制御プログラムまで、こなしてしまう。大抵はマスターが自分で組むのだが、センターのベーシック・モンスターに慣れた私には、プログラムの知識がない。草トーナメント前の数日は、ケンジは本当に寝ずに半田ゴテを片手、キーボードを片手にしている。

それで、トーナメント中は寝ている。

ダメージが累積する本格的なトーナメントの場合は壊すな、などと言う。

終わると、しばらくして起き出して、ログを再生し、端的に批評をする。

どこで覚えたのだろかと思えてしまうほどに膨大なモンスターの知識がこの男にはある。

使い慣れた半クラウチング・スタイルの〈ローラー・ビートル〉から、スタンディング・スタイルである〈アーマード・デュラハン〉という旧式でマイナーなモンスターに変えるように言ったのは、ケンジである。

確かに相性はいい。機動性は落ちるが、スピードに乗れば誰にも止められない。

無理に急停止しようとするれば、過負荷で足の構造材が折れ、スッテピング・モーターが煙を吹く。

むちゃなモンスターに聞こえるかもしれないが、高速機動中の各部の重心の制御さえ覚えれば、それほど難しくも、勝てないモンスターでもない。あとは、ステージの空間全てを頭に叩き込めばいいのである。読みと感覚のモンスター。センター上がりの私にはぴったりのモンスターだった。

ケンジが、昔、マチにいたというのは聞いた。

大戦期に破壊された旧都の閉鎖区域のことだ。

マチにいたというのは、マチで宝探しをしていたという事になる。大戦前の文化物を探してきて、売る。ディスク、家具、小物、そして、書籍。どれも高値で売れる。どうしようもないアウトローだった、ということだ。

それが、どこで気持ちを変えて、膨大な工学知識が必要なモンスター・エンジニアになったのかは知らない。たいていのプロ・エンジニアは三十代以上の脱サラしてきた人である。独学の人間は少ない。センスと知識の要求される職人の世界であるらしい。スター・エンジニアであればたいてい、たいそうな肩書が名前の脇についてくる。

とにかく、ケンジに出会って一年で、私は変わった。

変わりもする。何度も負け、欠点を的確に羅列されれば、甘さが消える。

降りるはずのステーションを、列車が過ぎる。

静かな暗がりの上に乗っている閑散とした、まぶしいホームがやって来るのをながめていた。ぼんやりと降車客に混じって降りていくケンジと私の不自然な、浮遊するような姿を夢想していた。そのうちにベルが鳴り、ドアがスライドしていく音を聞いてはじめて、私は乗り過ごしたことに気付いた。

告げようとして、ケンジがそれに気付いていないはずがない事に気付く。それでも表情を全く動かさずに、思考の中に自分を沈めている。

堅く閉ざされた唇は、ぴくりとも動かない。

それを横からジッと見上げ、トップのモンスターの事を考えているのだと、勝手に納得する。〈ブラッディ・バイソン〉のセッティング・データを見たのは初めてのはずである。それを元に、スター・エンジニアの設計思想を推測しているのだろうと、踏む。

(どこへ行こうというの)

自首しようとも言うのだろうか。それを考えるだけで、手に汗が滲む。端末を持つ手を代え、ケンジと同じ側の手で吊り革を掴む。

この計画を持ち出したのはケンジの方であった。

——数分であれば、トップ・リーグのモンスターを操作できる。

いつもの静かな口調でそう言った。

イワガミ・ベアリング杯という草トーナメントの中では最高額の賞金がつくトーナメントに損傷らしい損傷を受けずに勝利した直後、二週間前のことである。

自信過剰気味になっていた私は、二つ返事でその計画を了承した。罪の意識は無かった。思い出して、軽薄な判断だったと、過去の自分を消し去ってしまいたい、耐え難い気分になる。

火花を放っていた自信は、三秒で消えた。

レーダー・スクリーンに〈スケルトン〉の文字が現れ、気付くと行動不能のサインが出ていた。

——相手が悪い。

理解できる。百回エンケージしても、平均数秒で落とされるという確信がある。相手に損傷を与えるどころか、触れることも出来そうにない。〈ブラッディ・バイソン〉のトーン・ハンマーを動かすフレームすら与えられなかった。

運が良かったとは思う。これが〈スケルトン〉以外のモンスターなら、少なくとも数十秒は醜態をさらしていた。

何も出来ない自分を見るのは耐えられない。

自信が無ければ生き抜けない勝負の世界で、そういう自分を覚えているのは致命的なのだ。確信の無い自信を引き伸ばせるだけ引き伸ばし、虚勢を保ち続けられた者だけが生き残れる。自信も虚勢も無くなった時点で、そのマスターの選手生命は終わる。

一度自信を失った者は、判断がワンテンポ遅れる。零コンマの判断力が必要な世界においては、それだけで致命的になる。

唐突に、列車のニュース・スクリーンに《モーター・モンスター》の文字が流れた。心臓が止まったような気分になる。視界の真ん中にスクリーンを持ってきて、それを追う。ケンジが気がついていない様子はない。視線をぴくりとも動かさない。流れる文章を追う。

『……今日のモーター・モンスター、第二期第八戦は、コンピューターの故障により、ドローとなった。IMS社は事実の解明に全力を注ぐと釈明。次戦の第九戦の延期は濃厚、第八戦の再戦日は未定……』

息を呑んだ。当たり前のことだが、自分のしでかした事が夢でなかった事を知った。愕然とした気持ちが生足震わせ、震えが背骨を通して、脳に達する。思考が痺れる。呼吸が止まる。

下着を見ていたケンジが、能動的に私の方を向く。

「なに？」

声が上ずる。ケンジの目が迷う。私を静かな目で見下ろして、唇の向こうで歯をずらす。判断を迷っている時のくせだ。

「なに？ 言ってよ」

私を見つめる。無遠慮な視線で私の頭の中を探る。

耐え難い間があった。その間を打ち破るように、ケンジは鼻を鳴らした。

「……まちを、」

「えっ？」

「闇を、見に行かないか」

唐突に聞こえた。心の中でケンジの言葉を繰り返す。その言葉の意味が、雷雨の中を漂うガスの抜けた風船を、地を歩く一人の私に変えた。

闇を見に行く。

意図を考えるのが無駄になるほど、明快な言葉に思えた。心の中で呪文のように繰り返す。心の麻痺が、嘘のように溶けていく。

——闇を見に行く。

渦を巻いていた様々な気持ちが、ギュウッと一点に収束していく。

「……うん」

それしかない。

そう思った。どこかで、けたたましくベルが鳴る。

私たちは列車を降りた。

<スケルトン・マスター>キノシタ・マサトが闇を見たのは、一般にタイヨウマチと呼ばれる廃墟の地下深くだという。

様々なトラブルにより家族を、全てを失ったマサトは、自分の勝利を祝う二年越しの祝典を逃げ出し、子供の時に遊んだタイヨウマチにやってくる。絶望的なほどの自己嫌悪にさいなまれたこの少年は、非現実的な音に導かれ廃墟の地下深くに潜り、その奥底で真の闇を見る。

<洞窟には骸骨>は文章中のセリフで、これは現実逃避をしている自分に対する蔑みの言葉である。星の数ほどのマスターの頂点を極めた筈の少年から出たこの言葉は、《モーター・モンスター》に淡いあこがれを抱いていた私に、天地をひっくり返すような衝撃を与えた。

闇を見た少年は、地下深くで自己を確立し、地上に戻ってくる。

私が初めて人間性という言葉の意味に気付かされた瞬間がこの文章だった。現実から遠く離れた過去の名作に、過去の人間性があるのに気付きはじめた。

気付くと私は、IMSの直営センターにいた。

モンスターの挙動一つ一つにマスターの人間性を垣間見れる気がした。それが、私をモンスターに仕立て上げ、気付くと草トーナメントでそう簡単には負けなくなっていた。

《モーター・モンスター》は、人間性を否定され続けた私の縋る、唯一のワラシベだったのだ。

ケンジがどういう理由でエンジニアになったのか知らない。

いつでも口を閉ざし、自分の考えを外に漏らすことはない。いつでも私の前に立ち、広い背中を見せ続けて歩く。

私は、薄暗い廃線路を歩くケンジの背中を見ている。

うっとうしい下ばえの臭いと、虫の羽音がうるさい。マサトと自分との間にある時期的な格差を呪う。冷たく透きとおる新年の冬の夜の光は、現実の包み込むような蒸し苦しさの中にはない。

覆いしげる雑草を踏みわけて、かたい敷き石と枕木を選びながら進む。

歩幅の大きなケンジは私を置いて先に進む。コンソロールの入った重たいバッグを軽々と背負っている。バッグの黄が唯一ケンジの居場所を知らせる目印となって私を導いている。

三十分は歩いている。

当たり前だが人影は見えない。

廃線路から覗ける閉鎖区域の、生々しいはずの破壊の痕跡がぼんやりとしたひかりのなかで静かに眠っているように見える。未だに残っているとされる汚染物質の為、マチはほとんど手が付けられていない。

この広大な閉鎖区域には、マチ荒らしをする人間が通る現代のけもの道がある。

タイヨウマチとあからさまな誤訳で呼ばれているこのマチには、大ざっぱに分けて三つの<ミチ>が存在してる。道路づたいに来る経路、高速道路を北から来る経路、そして線路を歩いてくる経路の三つ。それぞれに一長一短がある。

ケンジが選んだのはマサトが通ったとされる経路で、現実的にもっとも監視網が整備されていない、侵入の容易な道である。

廃屋になった駅に辿り着き、線路と道路を隔てるフェンスを乗り越えるところから、物語は始

まる。

おもちゃのバレリーナのように軽快に、機械的に、心が踊りはじめている。

ぜんまいを巻いたのはケンジ。それが悲しくも、嬉しくもある。

タイヨウマチに入るのは初めてだ。序盤のマサトの興奮と感激の震えが私の身体に現実の震えとして伝わってくるのが分かる。何か新しいものに出会えるという、胸のすくような予感がしてくるのだ。

私は先ほどもまでの不安感を忘れて、そのふつつつと沸き立つ冒険心というものに浸った。

「ここだ」

気がつくときケンジが立ち止まっていた。

いくつ目かの駅の遺跡。

六年前の第五戦第九戦のタイヨウマチ・ステージ夜間戦で〈スケルトン〉が開始十分で立て続けに五機を沈め、世間がトップ・リーグに一人の化け物じみた、〈骸骨使い〉が存在する事を知ることになった記念碑的な舞台である。

架空世界の華やかさとは逆に、現実には寂れた旧式のプラットホームが、もの言わぬ石仏のように東西に並んで佇んでいる。

その東端のフェンスの前にいる。

おぼろな月の光に照らされ、その不格好に見えてしまうほど大きな荷物を背負っている。それが初めて痛々しく思えた。

「ねえ」

追いついた私は、初めてケンジと対面した気がした。

「なんだ」

「重くない？」

聞いた。初めて尋ねた気がする。それが妙に恥ずかしかった。ひかりの中でケンジが微笑し、それから歯を見せて笑った。

「重い。いや、たいして重くない」

いくぞ、と小さく呟いて、ケンジはフェンスを乗り越えた。私も続いた。

いつだったか、ケンジが＜洞窟には骸骨＞の解説をはじめた時があった。何かのトーナメントの二人だけの祝勝会で、ハンバーガーショップで香りのないコーヒーを飲んでいた。

小さなトーナメントに何度か勝ち、私が自信をつけはじめた矢先の事だった。

「あの話は、」

私は調子に乗って、今の自分の快進撃は＜洞窟には骸骨＞のおかげだ、こんな幸せな経験をしたことは今まで一度もなかった、と明かした。ケンジは突然薄い唇を閉じ、紙コップの中身を苦そうに嘗め、しばらくためらったあと、重々しく口を開いた。

「あの話は、地図だ。分かるか？」

そう言って、真剣な目で私を見る。私が答える間を与えず、一方的に話しはじめた。なにか、奥底に溜ったいらだちを吐き出すように、容赦なく、無駄なく、淡々と話す。

「あれを読めば、あの男の中心が、防壁がどこだったのか分かる。地図だ。一人の人間の地図だ。あいつが望んだ。そう書くように望んだ。だから、書き手はそう書いた。だから、書き手ですら驚くほどの真実味があの文章にはある」

「書き手？」

私は驚いた。＜洞窟には骸骨＞は四部構成である。祝典から消えたマサトが再び戻ってくるまでの十時間を書いた第一部、膨大な人数の《モーター・モンスター》関係者へのインタビューが並ぶ第二部、ライバルである＜ブラスター・マスター＞との四時間に渡る対談の第三部、そして、MJ誌の専属ライター陣による微に細を穿った全戦闘の解説の第四部。

特に第一部の苦渋に満ちたキノシタ・マサトの告白は様々な論議を巻き起こし、宣伝のための悪質なでっち上げだとか、祝典をすっぽかしたキングの自己正当化手段だとか、散々に言われた。第一部の著者の名前が明かされなかった事も、槍玉に上がり、公開せよ、いや出来ないという泥沼の無意味な言い争いになった。

ケンジの言葉は、著者を知っているという事を意味する。

「そうだ。あいつの幼なじみだ。あいつの体験の一部始終を聞き、それを文章にする。それがどういう意味だか分かるか？」

私はケンジの淡々とした迫力に押され、無言で首を横に振る。

「全てを理解するということだ。あいつの抱えている全てを、理解し、追体験し、あいつが見た闇を一緒に見ると言う事だよ。あいつの見た耐え難いほどに剥きだしの、愚かなものを見た。だから、その男は壊れた。普通ではなくなった。確かなはずの世界が消失するのを見た。あらゆる誇りを失った。何も信じなくなった。それはとても恐ろしい事だ」

ケンジは、熱を帯びた言葉をとぎり、気まずそうにコーヒーを口に含んだ。

「その、書いた人はどうなったの」

「さあ、まともでない事は確かだ」

タイヨウマチは、ぼんやりと寝ぼけて見えた。

あたたかい湿気に包まれている。マサトの通った経路が分かる。ここを歩き、あそこを跨ぎ、あの向こうには落ちた高速道路があると、実際の光景を見ながらいちいち解説できる。

ケンジは私の隣を歩き、月明かりに照らされた駅前を、懐かしそうにながめている。マチ荒らしをしていたときの思い出でもあるのだろうかと考え、私は私で文章でしか知らないそのコンクリートの遺跡を見ていた。

時間がかすみに溶けるような気がした。

駅前はいくつの字に折れる駅ビルの弧と、反対側の銀行、商店だった廃ビルの弧で描かれる楕円形をしている。

側にそそり立つ駅ビルを見上げ、そのざらりとしたの表面を触った。マサトの見たマチが、過去の街の生活がその触っている自分に重なり、のんびりとした気分ですれを楽しんでいるうちに、ケンジの声が遠くから聞こえた。

「むかし、雑草取りが楽しみだった頃があった」

振り返ると、月を見ていた。

「ん？」

一秒と、一分が等価に感じる。壁沿いに歩いて、ケンジの声に近づく。

「ガキにすらならない幼児だったころの話だ。両親の都合で、田舎に何カ月も滞在することになったときがあった」

「そう」

ケンジが能動的に昔の話をするのは初めてだ。

魅せられたように月を見つめている。

「友達から遠く離れ、排他的な田舎で友達も出来なかった。おれは退屈した。遊びたい盛りだ。それを見かねたばあちゃんが、おれに庭の雑草取りをさせた。きれいな芝生の上で、一日中雑草を取るんだ。それがおれの楽しみになった」

「雑草取りが？」

腕に触る。そうしないと、自分もケンジも、あたたかい空気に溶けてしまいそうな気がした。

「そう、普通にやればつまらない事かもしれない。だが、ばあちゃんは植物事典を取り出し、おれにいちいち雑草の名前を教えた。これはなにになに草、あれは何とか、とな。虫眼鏡を持ってきて、芝生に這いつくばって、細かい茎、葉、花の説明をしてくれた。初等教育を受ける前の話だ。抜いた雑草は辞書に挟んで押し花にした。おれは他にすることもなかったから、芝生の上に生える雑草を相手にすることになった」

ふしぎな光景が夜空を見上げるケンジに重なる。ケンジの背が高くなかった頃の、まるでおとぎ話のようにむかしの話。一緒に空を見上げて、そんな光景がその下のどこかにある気がしてくるのを楽しむ。

「知識というのは不思議なもので、知りはじめればどんなに退屈なものでも興味の対象になる。ああ、こいつは見たことがない。なんという草なのか。芝生の上に分厚い図鑑を無造作に置いて、実物と絵を見比べた。雑草から落ちた葉が、虫の死骸がしおりになった。即席の雑草学者の誕生だ。もちろん、ばあちゃんはおれに雑草は芝生を痛める悪い草だ、ということを含めることを忘れなかった。だから、おれは必死になって雑草を抜いた」

「しかし、雑草というのは花壇でぬくぬくとしているチューリップなどとは違って恐ろしいほどにしぶとい。抜いて、しばらくするとまた、同じ所に生えている。根っこまで抜かなきゃだめだ。一本でも抜き忘れるとだめだ。抜いても抜いても生えてくる」

ケンジが私を見る。妙に恥ずかしくなった。ケンジと向き合う。ケンジははにかんで続けた。「そうやって、おれが雑草駆除の専門家として活躍していたころ、ばあちゃんは花壇にスマレを植えた。可憐な薄紫色の花だ。ばあちゃんもそう思って植えたんだろう。しかし、しばらくすると、スマレが庭を占拠するようになった。あれは雑草だ。踏み付けても、根まで引っこ抜いても、また生えてくる」

「センターで会った時、」

「はじめて会ったとき？」

はっとする。自分の眼が戸惑っているのに気付く。

「そうだ。あのときから、ずっと気になっていたんだ。果たして、こいつは自分の名前を好きになれるのか、それとも、一生自分の名前に嫌悪感を感じ続けるのか、とな」

「しかし、親がスマレと名づけた気持ちは、おれのばあちゃんと同じだったのか。ただ可憐な名前だと思ってつけたのか。まあ、それすらどうでもいい。雑草は雑草らしくしぶとくあればいい。植えた人間の気持ちに忠実にある必要はない。花壇にちょこんとしているのが嫌なら、飛び出して庭を占拠すればいい。庭の主に嫌がられる雑草としてな。踏み潰されても、引っこ抜かれても、また生えてくればいい。それぐらいの生命力がある。あの草にはな」

「信じたくなった」

「それは光栄だ」

どちらが言うでもなく、歩きはじめる。

「今日の操作、それほど悪くなかったな」

私は、はっと現実に戻される思いがした。恐る恐るケンジを見上げ、その目を見、言葉の意味を思い出した。

「あれで？」

「ああ。＜ブラッディー・バイソン＞のセンサーが頭部に集中している事さえ覚えていればだ」

その通りなのだ。＜アーマード・デュラハン＞には頭部がない。＜スケルトン＞の電磁ニードルが頭部を狙って振り下ろされたとき、私は両腕、胴体にあたらぬように注意を払っていた。自分の操作していたモンスターに頭があるのを忘れていたのだ。

「しかし、どちらにしても三十秒は持たなかったな。左旋回をするときのくせを見抜かれれば終わりだ。軸足に重量をかけ過ぎている。あれでは分かってくれと言うようなものだ」

耳にタコが出来るぐらい聞かされているセンター時代からの癖だ。

「でも、情けなかったね」

「あいつは別物だ。異常だ。スマレは、ちゃんと反応できた。サード・リーグでのプレイ経験すらない素人にしては上出来だ。あれで充分」

「悔しいけどね」

「あいつにはなれないさ。惨めなものだ。＜スケルトン＞の操作が全てなのさ。それ以外を失ってしまった。自分を、他人を全てね。常に熱にうなされている。病気だ、いや、もう死んでいる」

(病気は私も同じだ)

「あいつになりたいと思うこと自体が愚かだ」

ケンジは、そう言って煙草に火を着けた。

「何も知らない人間が言う、言葉だ」

煙を吐く。吐き出された煙が、私とケンジの間をゆっくりと昇る。

「……私も、惨めだよ。何もない」

ケンジが突然、激しい視線を私にぶつけた。怒っている。激怒している。それが怖くて、思わず語尾が尻込んだ。

「本当に、何もないか？ あるだろ？」

本気で怒っている。語調が乱れている。それが、堪らなく嬉しく思えた。

また、涙。

最近良く泣く。急に泣き虫だった昔に戻った気がした。

「……ある、とおもう」

私は呟いた。

「一週間ほどまえ、サード・リーグで戦って見ないかという誘いを、とあるスポンサーから受けた。IMSへの接続料金、リーグ・エントリー料金は全額向こうが払う。賞金は山分けという話だ。大した金にはならない。よっぽど草トーナメントで賞金稼ぎをしていた方が金になる」

息をつかずに、ケンジが続ける。唐突に聞こえた。私は驚きで身を堅くして聞く。

「スポンサーは刃物会社で、おれたちに＜ブレード＞を使うモンスターに乗って欲しいと言ってきた。モンスターはまだ決まっていない。おれが設計するかもしれない。今までの路線と正反対だ。慣れるまでは勝てないだろう」

今までの鈍重な重装型モンスターから、シャープなヒューマノイド型へ転換することになる。花形ではある。おそらく、設計に無駄の多い女性のプロポーションをしたモンスターに乗せられるのだと思った。下のリーグではよくあることだ。

抵抗感はある。



競技のためのモンスターではなく見せ物だ。ショー・ダンサーだ。

「しかし、どうだ。サード・リーグで一年生き延びれば、IMSの永久接続権が貰える。もちろん、セカンド、トップに上がるにはここしかないし、レベルも今までとは格違いだ。どうだ、やってみないか？」

ケンジは乗り気だ。

迷う。ケンジは静かに待っている。

「そう、」

心のどこかで、何かが必死に抵抗している。

馬鹿げた決断だったと後悔するかもしれない。自分は月の魔法に騙されているのだと、自分の中の誰かが言う。

(しかし、私は、)

<了>